

高橋 慶治

はじめに

チベット語の格助詞については、能格現象に対する興味から GIS格助詞を研究することが多い。しかし、筆者は、この現象の理解には他の格助詞についても研究が必要であるとの立場から高橋(1989a, b)をまとめた。その後、Tournadre(1994)が独自に Trajectory Model を立て、LA格助詞について高橋(1989a, b)より明確なモデルを提示した。しかし、チベット語の文法現象の解明にとっては、格助詞の中でもとくにLA格助詞の文法機能について(さらにLA類格助詞についても)いっその研究が必要である。

なお、一般言語学的に近年「与格」に注目する向きが増えているように思われる。そのような状況の中で、チベット語の与格に関わる助詞を記述しておくことは価値があるものと考えられる。

さて、高橋(1989a)では、他の格助詞との関連で、とくに意味の面を重視して観察し、LA格助詞は移動や変化の到達点を表す助詞であると述べた。しかし、意味的に規定するだけではLA格助詞のすべてを記述したことにはならず、文法的な機能についての記述は不足していた。また、LA格助詞は、伝統文法において *la-don* 「LA類格助詞」と呼ばれる格助詞のグループに含まれているように、似た意味を持つ格助詞が他にもあり(DU格助詞、NA格助詞)、その違いを明確にする必要がある。チベット語の伝統文法では、LA類格助詞が第2格、第4格、第7格で用いられるとしている。それぞれ、与格、受益者格、位置格にあたる。しかし、格桑(1987)が指摘しているようなLA類格助詞の細かい使い分けについては、一般に記述されていない。

上で述べたように、本稿においてはLA格助詞を考察の対象とし、LA格助詞の意味機能と文法機能について考え、あわせて、LA格助詞と同じく LA類格助詞に分類される DU格助詞の分布を観察する<sup>1</sup>。

第1節では、統語的な位置(主語、目的語の位置)に現れる項を標示するLA格助

---

\* 本稿は、高橋(1995)第4章を加筆修正したものである。本稿は、1996年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「現代チベット語諸方言の記述的研究—とくに基礎的データの収集と分析—」(課題番号 08710359、代表者 高橋慶治)の成果の一部である。

<sup>1</sup> ただし、本稿では NA格助詞は対象としない。

詞を観察する。この位置に現れる名詞に対して DU格助詞は付加できない。第2節では、奪格的なニュアンスのLA格助詞の例をあげ、第3節で使役文に用いられるLA類格助詞を見る。

## 1. LA格助詞<sup>2</sup>とDU格助詞<sup>3</sup>の分布

筆者は、高橋(1989a)で LA格助詞を中心としてチベット語の格助詞を記述したが、DU格助詞については触れなかった。しかし、格桑(1987)の記述を見れば、LA格助詞とDU格助詞の分布は明らかに異なっている。本節においては、この点について確認し、考察を加えたい<sup>4</sup>。

LA格助詞とDU格助詞の分布が異なる統語的な位置としては、与格主語(所有構文を含む)、与格目的語(感情動詞構文<sup>5</sup>を含む)がある。いずれも、LA格助詞は使えるがDU格助詞は使えない。逆に、DU格助詞が使えてLA格助詞が使えないものとしては、形容詞語根に付加され状態変化を表す場合などがある<sup>6</sup>。

### 1.1 「与格主語」<sup>7</sup>

広い意味での与格主語構文には、所有を表すものと「獲得」を表すものがある。

---

<sup>2</sup> LA格助詞は付加される名詞の末尾のいかににかかわらず *la* を用いることができる。ただし、末尾字がないか *-'* の場合は末尾字として *-r* が付加される。なお、本稿ではNA格助詞を扱わない。NA格助詞は、LA格助詞と同様名詞の末尾のいかににかかわらず *na* が付加され、異形態はない。

<sup>3</sup> DU格助詞は前接する名詞の末尾字によって異形態をもつ。その形式は次のとおり：

| 末尾字                            | DU格助詞     |
|--------------------------------|-----------|
| <i>-ng, -d, -n, -m, -r, -l</i> | <i>du</i> |
| <i>-g, -b, da-drag</i>         | <i>tu</i> |
| <i>-s</i>                      | <i>su</i> |
| <i>-', mtha'-med</i>           | <i>ru</i> |

<sup>4</sup> 本節の議論のヒントは格桑(1987)の記述によるところが大きい。

<sup>5</sup> これらの構文の名称は、必ずしも一般に認められたものというわけではない。説明の便宜のために仮にこのように名付けるだけである。

<sup>6</sup> この種のDU格助詞については3.3節で触れる。なお、DU格助詞がより頻繁に用いられる例として *ched du*「～のために」などの副詞句を形成する語句があるが、比較的固定してしまっているので本稿では扱わない。

<sup>7</sup> 本稿では、2項動詞が用いられた文で通常の語順で左側にある項を「主語」と呼ぶことにする。また、右側にある項を「目的語」と呼ぶことになる。

以下では、前者を所有構文、後者を（狭義の）与格主語構文と呼ぶことにする。

広義の与格主語構文は、基本的には次の構造を持つ。

(1)  $N_1$ -LA  $N_2$  V<sup>9</sup>

所有構文では(1)の V として存在動詞が用いられ、狭義の与格主語構文では「獲得」を表す無意志動詞が用いられる。両者の構造は一見同等であるが、狭義の与格主語構文では、与格主語が1人称で、かつ動詞が完了のときには助動詞として *byung* を使うのに対して、所有構文では *byung* を使うことはできない<sup>9</sup>。意味的には、与格主語構文では受け手に向かって物の移動があるのに対し（たとえば、例(8)）、所有構文ではLA格名詞は存在者（所有物）の静止位置を表している（たとえば、例(5)）と言える。

最初に、LA格助詞が位置や方向を表す例として、たとえば、動詞 '*jog*「置く」や '*gro*「行く」が取るLA格名詞を見ておく。次の(2)(3)では、LA格助詞は位置や方向を表しているだけなので、DU格助詞に置き換えることが可能である。

(2) bkra-shis kyis deb cog-tse'i sgang la/du bzhag song/

<人名> GIS 本 机-GI 上 LA/DU 置いた AuxV

・タシは本を机の上においた

(3) bde-skyid las-khungs la/su phyin song/

<人名> 事務所 LA/DU 行った AuxV

・デキーは事務所に行った

ここでは、LA格助詞の代わりにDU格助詞を使っても意味は変わらない。すなわち、(8)で見る与格主語構文とは異なって、(2)(3)ではLA格助詞が「位置や方向を表す」という意味的な機能において用いられている。このような構文は、ここでは与格構文として扱わない。

<sup>9</sup> 略号表：Adj 形容詞、AuxV 助動詞、CONJ 接続詞、DU DU格助詞、GI GI格助詞、GIS GIS格助詞、h 敬語形、IMP 命令形、LA LA格助詞、N 名詞、NAS NAS格助詞、NEG 否定辞、NML 名詞化接辞、PART 不変化詞、PL 複数接辞、QT 引用標識、SFM 文末標識、TOP 話題化助詞、V 動詞、VE 存在動詞、VI 同定動詞、Vin 無意志的自動詞

<sup>9</sup> 高橋(1995)第5章1.3.2節参照

### 1.1.1 所有構文

まず、所有構文について、形式的に類似した存在構文と対比しながら観察する。

両者の構造は、次のように、存在位置（所有構文では所有者）を表すLA格名詞と存在者（所有構文では所有物）を表す絶対格名詞が存在動詞とともに用いられる。

(4)  $N_1$ -LA  $N_2$  VE

所有構文と存在構文は、表面的にはともに  $N_1$  が表す位置に  $N_2$  が存在することを表している。しかし、両者は異なる構造をもつと考えるべきである。

まず、語順が異なる。(5)が所有構文、(6)が存在構文の例である。基本的な語順は、所有構文では存在の位置すなわち所有者（LA格名詞）が文頭に立つことが多い。存在構文では存在者が文頭に立つことが多い。

(5)a. ngar dngul mang-po yod/

私-LA お金 多い VE

・私にはお金がたくさんある

b. bkra-shis la bu-mo gnyis yod·pa red/

<人名> LA 少女 2 VE

・タシには娘が二人いる

(6)a. bsod-nams khang-pa'i nang la 'dug/

<人名> 家-GI 中 LA VE

・ソナムは家の中にいる

b. deb de cog-tse'i sgang la 'dug/

本 それ 机-GI 上 LA VE

・その本は机の上にある

ただし、語順だけでは両者が異なっているとは言えない。チベット語は語順が比較的的自由であるからそれぞれの語順がこのように固定されているわけではなく、両者を存在を表す構文として一つに扱う見方がありえよう。しかし、チベット語では、空間的な位置を表す場合には場所名詞を使わなければならない。つまり、両者の構文は、LA格名詞が語彙的に異なっている。したがって、

(7) nga'i rtsa la deb yod/

私-GI 所 LA 本 VE

・私の所に本がある

と言えば存在構文となり、これは所有を表さない。文脈によっては所有を表す可能性もあるが、それは文脈からの推測にすぎない<sup>10</sup>。

さらに、以上の違いを反映していると考えられる両者の大きな違いは、LA格助詞の異なる用法にかかわっている。格桑(1987)によれば、存在構文においてはLA類格助詞に含まれるすべての助詞(LA格助詞、DU格助詞、NA格助詞)を用いることができるのに対し、所有構文では所有者を表す名詞にはLA格助詞のみが用いられ、他のLA類格助詞は用いられない。次の例を見られたい。

(5') a. \*nga ru dngul mang-po yod/

私 DU お金 多い VE

b. \*bkra-shis su bu-mo gnyis yod·pa red/

<人名> DU 少女 2 VE

(6') a. bsod-nams khang-pa'i nang du 'dug/

<人名> 家-GI 中 DU VE

・ソナムは家の中にいる

b. deb de cog-tse'i sgang du 'dug/

本 それ 机-GI 上 DU VE

・その本は机の上にある

(5')の所有構文は、(5)と異なりDU格助詞を使うことによって不適格になっている。それに対し、(6')は(6)の存在構文と同じであって、LA格助詞とDU格助詞に意味上の差異はない。

### 1.1.2 与格主語構文

次に、狭義の与格主語構文について見てみよう。格桑(1987)は、「獲得」を表す動詞についても所有構文と同様に、獲得者を表すLA格助詞の代わりにDU格助詞を用いることはできないことを指摘している。

(8) a. bkra-shis la/\*su phogs thob song/

<人名> LA/DU 給料 得る AuxV

<sup>10</sup> たとえば、nga'i rtsa la khong gi deb yod/

・私の所に彼の本がある

・タシは給料を得た

b. bkra-shis la/\*su deb rnyed song/

<人名> LA/DU 本 見つけた AuxV

・タシは本を見つけた

(8)の LA格助詞は、*phogs*「給料」や *deb*「本」が *bkra-shis*「タシ」に向かう運動の到達点を表しており、与格主語構文ははっきりと方向性を表している。しかし、方向性を表しているだけであればDU格助詞を使っても問題はないはずであるのに、与格主語構文ではDU格助詞（上の例では異形態である *su*）を用いると容認されない。すなわち、LA格助詞は文法的な機能を担うが DU格助詞は文法的な機能を担わないと考えられる。

(8)のような「与格主語」を取る動詞については、従来、受け手を表す名詞句がLA格助詞を取って「主語の位置」にあると漠然と考えられてきたが、このLA格名詞の項が「主語の位置」を占めているということは形式的な研究に基づいて明らかにされているわけではない。しかし、ここまで見てきたように、LA格助詞が LA類格助詞と呼ばれる格助詞グループに含まれながら、この位置で他の LA類格助詞を使えない点からして、LA格助詞には他の格助詞とは異なった機能があると考えられる。それは、主語名詞と結びつく機能である。1.1.1節で見た所有構文のLA格助詞についても同様のことが言えよう。

## 1.2 「与格目的語」

次に、LA格名詞が「目的語」の機能を果たしている構文を観察する。LA格は移動の到達点であるから基本的には与格を表す<sup>11</sup>。この場合も、1.1節で見た「与格主語」の場合と同様に DU格助詞などとは交替できない。次の(9)は、LA格名詞が受け手、絶対格名詞が被動者になっている。(10)は複合動詞の目的語がLA格助詞を取っている例である。

(9) a. bkra-shis kyis bsod-nams la/\*su skad-cha bshad song/

<人名> GIS <人名> LA/DU 話-φ 話した AuxV

・タシはソナムに話をした

<sup>11</sup> 格桑(1987)は、与格目的語を「対象賓語」と名付け、間接目的語および感情動詞の感情の対象を表すとしている。これには *la* と *-r* のみが用いられると記述してあるが、あとの記述ではすべて「*la*類格助詞」として言及している。

- b. bkra-shis kyis bu-mo chung-chung la/\*du smyu-gu sprad song/  
 <人名> GIS 少女 小さい LA/DU ペン-φ 与えた AuxV  
 ・タシは少女にペンを与えた

- (10)a. zhi-mi des dkar-yol la/\*du lce-ldag btang song/  
 猫 それ-GIS 茶碗 LA/DU 舌舐め 送った AuxV  
 ・その猫は茶碗をなめた
- b. bkra-shis kyis bsod-nams la/\*su rogs byas song/  
 <人名> GIS <人名> LA/DU 助け VBL(pf) AuxV  
 ・タシはソナムを助けた

さらに、*lta*「見る」や *rten*「頼る」という動詞についてもその行為の対象や目標として取る名詞のLA格助詞を DU格助詞に置き換えることはできない。

- (11) bkra-shis kyis me-tog la/\*tu bltas song/  
 <人名> GIS 花 LA/DU 見た AuxV  
 ・タシは花を見た

- (12) bkra-shis kyis rtsig-pa la/\*ru brten song/  
 <人名> GIS 壁 LA/DU 依った AuxV  
 ・タシは壁に寄り掛かった

高橋(1989a)では、目的語が絶対格になる場合とLA格になる場合を比較して、絶対格になる場合は目的語が表す実体そのものが移動・変化することを表し、LA格になる場合は移動や変化の到達点を意味することを示した。さらに、(9)～(12)の例からは目的語を表すLA格助詞が、同様の意味を持つ他の LA類格助詞に置き換えられないことがわかる。それは、与格主語の場合と同様、LA格助詞には意味的な機能以外に文法的な機能があることを示している。

このように見てくると、同じくLA格名詞を取る動詞であっても、目的語になっているものと場所や到達点だけを表しているものとは、それぞれのLA格名詞の文法上の機能が実際には異なっていると考えることができる。DU格助詞を使うことができない例では、LA格名詞が動詞の目的語つまり必須項になっていることがわかる。

### 1.3 感情動詞

最後に、感情を表す動詞が取るLA格名詞について考えてみよう。感情動詞におい

て感情の対象を表す LA格助詞も DU格助詞と置き換えることができない。

(13)a. bkra-shis bsod-nams la zhed-gyis/

〈人名〉 〈人名〉 LA 恐い-AuxV

・タシはソナムを恐がっている

b. \*bkra-shis bsod-nams su zhed-gyis/

〈人名〉 〈人名〉 DU 恐い-AuxV

感情動詞は自動詞と同様主語（感情の主体）が絶対格になる。しかし、(3)で見たように、'gro「行く」のような自動詞の場合、到達点を表すLA格助詞が DU格助詞と交替できるのに対し、感情動詞ではそれが許されない。このことから、感情動詞では2項（感情の主体と対象）を必要としていると考えるべきである<sup>12</sup>。

また、感情を表す動詞のうち、*dga'-po* は項の数によって意味が異なる<sup>13</sup>。

(14)a. bkra-shis bde-skyid la dga'-po 'dug/

〈人名〉 〈人名〉 LA 好きだ VE

・タシはデキーが好きだ

b. bkra-shis dga'-po 'dug/

〈人名〉 嬉しい VE

・タシは喜んでいる

このことも、感情動詞が感情の対象を取る場合には2項動詞になっていることを示

<sup>12</sup> 筆者は、このような動詞群のLA格助詞について「対格助詞 objective ではない。」と述べたことがある（高橋[1992c:356, 註20]）。そこでは、これらの動詞を「絶対自動詞」（＝無対自動詞）として扱ったが、「感情を表す動詞が絶対自動詞であると言えるかどうかには（中略）疑問が残る。」（同上）とした。それは、感情の対象が目的語として扱えるかどうかを判断できなかったからである。LA格助詞は明らかに対格助詞でなく、意味的には感情の向かう方向を表しているが、感情動詞は感情の対象を表す名詞句を取らなければならないので2項動詞と考えるべきである。Tournadre(1991)も動詞に自動詞と他動詞の対立があると言うことを避けて、動詞の分類としては1項動詞 one-place predicate、2項動詞 two-place predicate などのようにし、感情を表す動詞群も2項動詞に分類している。

<sup>13</sup> *dga'-po* は形容詞に分類されるが、ここではチベット語の形容詞は動詞とともに動詞類と言えるグループをなしているという考えから動詞として扱う。



している。

これは、所有構文、存在構文とも関連する。上で見たように、存在位置を表すLA格助詞がDU格助詞と交替できるのに対し、所有者を表すLA格助詞ではそれは許されない。したがって、存在を表す助動詞が1項動詞であるのに対し、所有を表す場合には2項を必要とする動詞になっていると考えられる。

チベット語においては他動詞は能格構文を取るはずであるが、1.1節の与格主語構文とこの感情動詞構文ではそうはならない。与格主語構文については、主語を格助詞で標示し目的語を絶対格にする点で形式的には擬似的な能格構文と言える。GIS格助詞を取らずLA格助詞を取ることはやはり意味的な基準が働いていると思われる。感情動詞について見ると、それは2項動詞であるが、主語を絶対格にし、目的語をLA格助詞で格標示する点でチベット語の典型的な他動詞とは言えない。2項を必要とする点では、典型的な自動詞とも言えない。行為性が低く状態性が高いので、主語が絶対格で表されると考えられる<sup>14</sup>。与格主語構文にしる感情動詞構文にしる、2項を必要としていながら主語名詞がGIS格助詞を取らない点は、チベット語の能格性が動詞の意味に基づく格標示であることを示唆する<sup>15</sup>。

#### 1.4 まとめ

以上の観察から、LA格助詞のみが許される場合は明らかに統語的な位置に関係していると考えられる。すなわち、LA格助詞は与格主語や与格目的語の位置で現れることができるが、DU格助詞はそのような文法項を表すことができない。したがって、DU格助詞が意味機能を中心として場所格を表すのに対し、LA格助詞は場所を表すと同時に与格という文法機能を含んだ格を表すという二つの用法を持っていると言える。

なお、本節でのこれまでの観察に関連する事実として、名詞化接辞 *mkhan* が広義の与格主語構文を形成する動詞に付加された場合に、動詞の項の中で対応する項がLA格名詞であるという点があげられる。この点は高橋(1995)の第5章で詳しく観察している。

DU格助詞だけが許される例については、使役構文を観察する際に触れる(第3

---

<sup>14</sup> 動詞化詞を使い行為性を高めると、感情の主体が行為者となってGIS格助詞を取ることができる。高橋(1992c:356)を参照のこと。

<sup>15</sup> なお、主語を絶対格とし目的語に特別な格形式を与える感情動詞構文は反能格 *anti-ergative* であるとも考えることができるが、反能格がどのような構造を持つかが一般的に明確にされていないのでチベット語の感情動詞構文が反能格であるかどうかについては保留しておく。

節)。なお、本節では、NA格助詞については触れなかったが、場所を表す場合以外はいずれの例においても許されない。

実際のところ DU格助詞や NA格助詞が現れるのは多くの場合文語なので、現代口語では適切な判断はできにくい。格桑(1987)が文語について記述しているような分布、すなわち、DU格助詞、NA格助詞が現れるところでは概してLA格助詞も現れるが、LA格助詞の現れるところでDU格助詞、NA格助詞が現れるとは限らないということが正しいとすれば、現代口語において LA格助詞が DU格助詞、NA格助詞に取って代わるようになったことも不思議ではない。LA格助詞で代用できないDU格助詞、NA格助詞のみが現代語においても残存しているということである<sup>16</sup>。

以上のことから、LA類格助詞内部のそれぞれの相違点には意味的なもののほかに、文法的な区別があることがわかる。

## 2. 奪格的なLA格

本節では、LA格助詞の意味について再度考察してみよう。以下の観察から、LA格助詞はいわゆる与格よりも広い範囲を表すことがわかる。

LA格助詞は意味的に移動・変化の到達点を表し、前節の記述においても、LA格助詞が文法的な項を格標示しているとはいえ、それが付加された名詞が表す実体・状態に向かって移動・変化するという意味を基本的に持っていると考えた。ところが、実際には起点を表しているように見えるLA格助詞がある。その意味解釈としては、ある行為が実行された位置を表すと考えることも可能であるが、LA格が到達点を表すということを基本的な意味としているとすれば、ここで示される起点のような用法はまったく矛盾すると言わざるをえない。高橋(1989a)で示したが、チベット語は意味機能にしたがって格形式を選択している。行為の位置を表す場合でも移動の起点となる場合は奪格が用いられる(例(21))。

ここで観察するLA格助詞の使用は、LA格助詞がたんに方向や位置を表しているとは言えない点で興味深い<sup>17</sup>。

---

<sup>16</sup> NA格助詞の意味は、静止的な位置を表すということで比較的明確である。現代語では、NA格助詞だけが使われる文脈は、接続詞として動詞に付加され仮定節を導く場合だけであろう。接続詞的な用法でのLA格助詞とNA格助詞は、両者の意味の違いを反映していると考えられるが、その分析は今後の課題である。

<sup>17</sup> Tournadre(1994)も、基本的にはLA格助詞の使用はその意味にしたがっていると主張する。

最初の例は、*chang*「チベット・ビール」の原料をLA格名詞で表している。原料は変化の起点であると言える。

- (15) *ngas nas la/nas chang bzos·pa yin/*  
私-GIS 大麦 LA/NAS チャン 作った-PART VI  
・私は大麦でチャンを作った

このような文意を持った例では、原料を表す名詞句は一般的に奪格が期待される。実際、NAS格助詞を使っても適格である。

次の例では、*nyan*「聴く」という知覚動詞を用いている。*nyan* はLA格名詞を取って、「～に耳を傾ける」という意味になる。次のように目的語としての絶対格名詞がなくLA格名詞だけが現れる場合は、NAS格助詞は容認されない。

- (16) *bkra-shis kyis bsod-nams la/\*nas nyan song/*  
〈人名〉 GIS 〈人名〉 LA/NAS 聴いた AuxV  
・タシはソナム（の言っていること）を聴いた

この例では、LA格名詞は注意を向ける対象という意味しか考えられないであろう。しかし、次の2例ではその解釈だけが正しいとは言えない。

- (17) *man-ngag ni legs-ldan la gsan no zhes kyang …*  
報告 TOP 〈人名〉 LA 聴いた(h) SFM QT CONJ  
・報告はレグデンからお聞きになったというけれども … *Tāranātha*:108.6.

- (18) *bod-skad rgan·lags la nyan·pa yin/*  
チベット語 先生(h) LA 聴く-PART VI  
・(私は)チベット語を先生から聴いた。

(17)(18)は注意を向ける方向をLA格で表しているとも言えるが、(15)と同様に、LA格が起点を表しているとも考えられる。Tsultrim Kelsang氏の判断によると、(17)ではLA格助詞を使う方が普通であるが、LA格助詞の代わりにNAS格助詞を使ってもよい。(17)(18)でNAS格助詞を使える点を考えると、実際に聞く内容を表す名詞が絶対格で現れている場合、LA格助詞の意味が注意を向ける対象を表しているとは言いにくくなる。

より具体的な起点を表す名詞句をLA格で表す動詞に *gla*「借りる、貸借りする」

がある。文型としては、借り手（すなわち受け手）が行為者として GIS格で、貸し手（起点）が LA格で、そして借用物が絶対格で表される。

- (19) bkra-shis la rta mang-po yod tsang ngas bkra-shis la rta gcig glas·pa yin/  
〈人名〉 LA 馬 多い VE CONJ 私-GIS 〈人名〉 LA 馬 一 借りた-PART VI  
・タシはたくさんの馬を持っているので私はタシから馬を一頭借りた

ここで用いられている動詞 *gla* は「借りる」であるから、賃借料という点から見ると金銭が借り手から貸し手へ移動している。すなわち行為者は行為の起点であると同時に賃借料の移動の起点であり、その到達点が LA格で表されていると言えると思われるかもしれない。しかし、例文にあるように移動物は絶対格名詞で表された賃借される対象（「馬」）であり、賃借料ではない。チベット語が常に意味的な要因で格助詞を選んでいるとすれば、このような用法は破格であると言わざるをえない。さらに、次の例を見ていただきたい。

- (20) nga la rku-ma shor song/  
私 LA 泥棒 失った AuxV  
・私は盗みにあった

例文(20)では、意味としては「被害」を受けたわけであるから受動的なニュアンスが感じられるので LA格助詞を用いているとも言えるが、動詞 *shor* は本来「失う」という意味で、もともと離脱の意味を持ち、しかも、過去の助動詞としては「一方向性」<sup>18</sup> の *song* が用いられているので、経験者から離れていくニュアンスを明らかにしている。（この場合、「+方向性」の *byung* を使うことはできない。）したがって、この LA格助詞を位置や到達点であると考ええると、全体としては矛盾に満ちた意味構造を考えざるをえなくなってしまう。また、この例では LA格助詞の代わりに DU格助詞を使うことができないので、第1節で見たように、この LA格名詞は統語的な位置にあることがわかる。

なお、上の例で、LA格を位置格として「私において盗まれた」という解釈を考えたとしても、行為の到達点を表すはずの LA格助詞を用いるのは奇妙である。たとえば、次の例では、「塩湖」に LA格助詞ではなく、NAS格助詞が用いられる。

---

<sup>18</sup> 武内(1978)を参照のこと。

(21) bkra-shis kyis tshwa-mtsho nas/\*la tshwa blangs·pa red/

<人名> GIS 塩湖 NAS/LA 塩 取った-PART VI

・タシは塩湖で塩を取った

すなわち、「取る」という行為によって移動する物の出所を表すために奪格が用いられる。*tshwa-mtsho nas*「塩湖から」という NAS格助詞を用いた表現の方が、「取る」という行為の場所を表すために LA格助詞を取って *tshwa-mtsho la*「塩湖で」とするよりも自然である<sup>19</sup>。ところが、(20)では、*nga la* に対して *nga nas/las* というように奪格を用いることはできない。また、1.1節でも述べたように、LA格が位置を表す場合は、それが付加される名詞は基本的に場所を表す名詞でなければならない。その点でも、この例で「私において」という解釈は成り立ちにくい。

次の(22)は、ある少女から言葉を引き出そうということであるが、その意味では「その少女」の格は奪格であることが期待される。確かに、インフォーマントは NAS格助詞も使えると判断した。しかし、実際によく用いられる格は LA格であるという。

(22) nga lung-pa'i phur yod·pa'i bu-mo de la gtam-kha len du 'gro …

私 谷-GI 上-LA VE-NML-GI 少女 それ LA 話 取る DU 行く

・私は谷の上にいるその娘に話をさせに行く *ro sgrung 7:20-8:1.*

(23) bu-mo des gtam-kha mi len·par mo-rang gi nang du song/

少女 それ-GIS 話 NEG 取る-NML-LA 彼女 GI 中 DU AuxV

・その娘は話をせず彼女自身の家に行った *ro sgrung 9:15-6.*

(22)の LA格名詞 (*bu-mo de la*「その少女に」) は '*gro*「行く」の目的地を表すものではない。'*gro*「行く」の到達点は場所を表す名詞が用いられ、日本語と同じように *bu-mo de'i rtsa la*「その娘のところに」というように人間ではなく場所として明示しなければならないからである。(23)で GIS格で現れている行為者名詞が(22)では LA格助詞を取っていることになる。すなわち、(22)において *bu-mo de la* は *len* に対する行為者、いわゆる意味上の主語になっている。(22)は、意味的には使役的なニュアンスを持っており *bu-mo de* が被使役者の役割を果たしているのだが、そのような使役の意味を保証する語(たとえば、使役動詞)は含まれていない。

<sup>19</sup> このような例については高橋(1989a)と高橋(1995)の第1章を参照されたい。

以上、ここにあげたLA格助詞の例は、LA格が移動の到達点だけを表しているのではないことを示している。確かに、このような場合にLA格が用いられるということは、行為者が対象に対して積極的に働きかけて、必要とするものや事態を引き出していると解釈できるかもしれない<sup>20</sup>。しかし、次の点は解決されない。

- 1) 例(20)のように文全体の構造としてLA格助詞を奪格的に解釈せざるを得ない例がある。
- 2) 複合動詞では、積極的に働きかけている対象が移動・変化の主体の時にはLA格助詞を取らず、絶対格になる。
- 3) 次節で見るように使役構文の自動詞補文では被使役者はLA格助詞を使いにくい。

ある種の行為については、何らかの対象物の移動を伴う。たとえば、「借りる」の場合には、借用物が貸し手から借り手に移動する。しかし、「借りる」という行為は借り手から貸し手に向かって行われる行為であって、行為の方向とそれに伴うものの移動の方向が一致せず、正反対である。このとき、たとえば日本語であれば、「貸し手」に対して「～に」と「～から」の両方の格助詞が使えるのだが、チベット語の場合、(16)～(20)ではLA格助詞しか許されなかった。これは、チベット語では文法的な機能を果たす項にはLA格助詞が用いられることを示している。

### 3. 使役構文の中のLA類格助詞

本節では、使役構文中に用いられるLA類格助詞を観察する。

格桑(1982)は次の3種の使役構文を提示している(本稿の表記法に変更する)。

- (A) Vin + par byed
- (B) V + la-don + 'jug
- (C) Adj(stem) + la-don + gtong

(A)の Vin は格桑の用語では「不自主動詞」、筆者が「無意志動詞」と呼んでいるものである。格桑(1982)はあげていないが、格桑(1987)は *byed*「する」の代わりに *bzo*「作る」も使えることを提示しており、Tsultrim Kelsang 氏は後者の

<sup>20</sup> この解釈に従えば、行為者からの働きかけのない典型的な奪格としてはLA格助詞を使えないということになり、例(21)でLA格助詞を使えないことを説明できる。この解釈は、LA格助詞の基本的な意味に矛盾しないのでたいへん魅力的であるが、本文で示したようにこれでは解釈できない例もある。

みを容認する。(B)はすべての動詞に対して用いる形式としてあげられている。(C)は形容詞語幹にLA類格助詞を付加して構成する。なお、(B)(C)の *la-don* は格桑(1982)ではLA類格助詞を意味しているが、のちに見るように動詞に付加されるこの位置では実際にはDU格助詞のみが用いられる。また、(B)の *'jug* は「入れる」、(C)の *gtong* は「送る」という意味である。

チベット語の使役文は、使役動詞が主動詞となり、その補文として被使役者の動作または状態変化を表す動詞句(本稿では、*Snuc* のこと。3.1節でも言及する)が埋め込まれていると考えられる。使役構文におけるLA類格助詞の使用については、次の2点にまとめられる。第1点は(B)の使役構文の他動詞補文においては被使役者がLA格助詞で格標示されること、第2点は(B)(C)の構造において動詞または形容詞語幹に付くLA類格助詞としてはDU格助詞しか用いられないことである<sup>21</sup>。本稿で考察しているLA類格助詞が関連する使役文は(B)と(C)の構文であるが、(A)の構造の特徴を確認した上でそれらの構造について考察する。

### 3.1 無意志動詞の使役文

まず、(A)のタイプの使役構文について見る。

格桑(1987)は、上述のように無意志動詞の使役文について次の構造を提示している。

(24) *Vin + par byed/bzo*

これは、動詞を名詞化接辞 *pa* によって名詞化し<sup>22</sup>、それにLA格助詞 *-r* を加えて、さらに動詞 *byed*「する」または *bzo*「作る」を付加した構造になっており、直接的には「～が・・・するようにする」という意味を表す。このタイプの使役文構造は名詞化接辞 *pa* を使っているので、その節内にある項の格助詞は変更されない(Takeuchi and Takahashi[1994]参照)。

格桑(1982:35)の例文を見る。

(25)a. *nga-tsho'i las-don tan-tan 'grub-kyi red/*  
私-PL-GI 仕事 きっと 完成する-PART VI  
・私たちの仕事はきっと完成するだろう

<sup>21</sup> 文語には、動詞語幹に付いて接続詞的に用いられるLA格助詞があるが、使役構文で現れるものとはタイプが異なる。

<sup>22</sup> 名詞化接辞 *pa* には、音韻論的に条件付けられた異形態 *ba* がある。

- b. *nga-tshos 'bad-brtson-chen-pos las-don 'grub·par byed dgos/*  
 私-PL-GIS 一生懸命に 仕事 完成する-NML-LA する <義務>  
 ・私たちは一生懸命に仕事が完成するようにしなければならない

(25a)は無意志的な自動詞を用いた非使役文であり、(25b)がこれに対応する使役文である。(25a)では、*nga-tsho'i las-don*が無意志的有対自動詞 '*grub*の主語である。(25b)では、やはり *las-don*が '*grub*の主語であるが、全体の主語は *nga-tshos*であり、*byed*が主動詞である。このような構造は文語文には比較的よく見られる。

さて、上の例では、補文に無意志的な自動詞が用いられており、その主語は本来絶対格名詞でしか現れないので、補文の主語になっているのか主文の目的語になっているのかを判断できないという問題が生じる。しかし、(A)のタイプの構造についてより興味深いのは、名詞化接辞 *pa*によって導かれる名詞節が節内の各項の本来の格形式を保持するため、他動詞文が用いられるときは能格構文を取るという点である。たとえば、格桑(1982:37)は次の(26b)の例をあげている。

- (26)a. *gnas-tshul 'di mi tshang-mas shes-kyi red/*  
 状況 これ 人 全員-GIS 知る-PART VI  
 ・この状況をみんなが知る
- b. *gnas-tshul 'di mi tshang-mas shes·par byed dgos/*  
 状況 これ 人 全員-GIS 知る-NML-LA する <義務>  
 ・この状況はみんなに知らせなければならない

(26a)のような単文において *shes*「知る」が取る二つの項は GIS格名詞と絶対格名詞である。そして、(26b)においてもこの格形式はそれぞれの項で保持されていることがわかる。したがって、(26b)には名詞節が埋め込まれており、その構造は次のように仮定できる<sup>23</sup>。

- (27) [<sub>NP</sub> [<sub>S<sub>Nuc</sub></sub> *gnas-tshul 'di mi tshang-mas shes*]<sub>·pa</sub>]-r byed dgos/

補文の *Snuc* は武内(1978:78)で提案された構造であり、単文において中核的な部分を構成する。すなわち、「*Snuc* は、文の表す事態の部分、いわば、文の基本内

<sup>23</sup> *gnas-tshul 'di* については、話題化して *Snuc* の外に出ている可能性があるが、ここではその点は考察しない。



容を示す部分」であり、文は、Snuc を中心に、文の表す事態に対する話し手の態度を表す Modus (法的な要素) や Int (疑問) を付加されて成立するとされている。ここでは、Snuc は名詞化接辞 *pa* を付加されて名詞節になっている。すなわち、Modus を表す助動詞が付加されていない文の中心部分が名詞化されたので格形式が変更されないのである。

格桑(1982:37)は、(26)と並行して (B) のタイプの次の例もあげている。

- (28) gnas-tshul 'di mi tshang-ma la shes su 'jug dgos/<sup>24</sup>  
 状況           これ 人 全員           LA 知る DU させる <義務>  
 ・この状況はみんなに知らせなければならない

(28)の使役構文では、*shes* が取る項のうち(26a)で GIS格名詞であった項がLA格になっている。すなわち、埋め込まれた動詞句がもとの格形式を保っていないことになる。形式的には、主動詞として *byed* ではなく '*jug* が使われているほか、埋め込み文を導く標識が、上の(26b)の名詞化接辞 *pa* に対して、DU格助詞になっている。次の3.2節でこの使役文の構造について考察する。

### 3.2 被使役者の格

ここでは、(B) のタイプの使役文を扱う。

3.1節の最後で触れたように、名詞化接辞 *pa* を使った使役構文では名詞節内の格形式は変更されないのに、'*jug* を使った使役構文では被使役者名詞の格形式が変更される。

V+DU+'*jug* という構造を取る使役構文の '*jug* は、本動詞としては「入れる」という意味で用いられる。したがって、使役構文も「～を・・・に入れる」という意味が本来あったのではないかと考えられるが、構造上は必ずしもそのように解釈されるようになっていない。次の例を見ていただきたい。(29a)が自動詞補文、(29b)が他動詞補文を持つ使役文である。

- (29)a. bkra-shis kyis nga lha-sa la 'gro ru bcug byung/  
 <人名>   GIS 私   ラサ   LA 行く DU させた AuxV  
 ・タシは私をラサに行かせた
- b. ngas khor chu-'khor skor du bcug·pa yin/  
 私-GIS 彼-LA 水車           回す DU させた -PART VI

<sup>24</sup> Tsultrim Kelsang 氏によれば、*shes su* は /-shee ru/と発音される。

・私は彼に水車を回させた

(29a)の自動詞補文を持つ使役文では、*nga*「私」が絶対格であるので形式的には *bcug* (pf. < impf. 'jug) の被動者になっていると解釈できるが、(29b)の他動詞補文では *kho*「彼」はLA格助詞を取っており *bcug*の被動者になっているとは考えにくい。このように、使役構文においては、埋め込み文の動詞が自動詞であるか他動詞であるかによってその構造上の違いが現れる。自動詞補文の被使役者は概して絶対格のみが許され、他動詞補文の被使役者は、絶対格も許されるが、原則としてLA格になる。以下では、この点を観察する。

動詞に付加されている DU格助詞は、LA格助詞と交替することはできない。この点については、次の3.3節で触れることになる。

### 3.2.1 自動詞補文

まず、補文の動詞が自動詞である場合を見ておく。自動詞の主語は通常絶対格で現れ、使役構文の中に埋め込まれた場合も格形式は変更されない。

(30) ... a-ma dang khong gnyis  $\phi$  /\*la/\*kyis 'thab tu ma-'jug cig/  
母 DANG 彼(h) 2  $\phi$ /LA/GIS 争う DU NEG-させる IMP  
・母と彼女の二人に喧嘩をさせるな *ro sgrung* 14:9-10.

(31) bkra-shis kyis bsod-nams  $\phi$  /\*la ngu ru bcug song/  
<人名> GIS <人名>  $\phi$ /LA 泣く DU させた AuxV  
・タシはソナムを泣かせた

(32) bkra-shis kyis bsod-nams  $\phi$  /\*la slob-grwar yong du bcug song/  
<人名> GIS <人名>  $\phi$ /LA 学校-LA 来る DU させた AuxV  
・タシはソナムを学校に来させた

(30)は命令文であって、行為者である使役者は表面に現れず、*a-ma dang khong gnyis*「母と彼女の二人」が被使役者である。(31)の *ngu*「泣く」は意志動詞であって、主文では行為者が GIS格助詞を取る例があるが、補文においては GIS格助詞もLA格助詞も用いられない。

ただし、次のように、LA格であっても完全には不適格にならない場合がある。

(33) bkra-shis kyis bsod-nams  $\phi$  /?la 'gro ru bcug·pa red/

<人名> GIS <人名>  $\phi$  /LA 行く DU させた-PART VI

・タシはソナムに行かせた

(34) bkra-shis kyis bsod-nams  $\phi$  /?la nang la sdod du bcug song/

<人名> GIS <人名>  $\phi$  /LA 中 LA 居る DU させた AuxV

・タシはソナムに家にいさせた

(35) bsod-nams kyis bkra-shis  $\phi$  /?la brag-logs kyi phag tu yib tu bcug song/

<人名> GIS <人名>  $\phi$  /LA 岩 GI 背後 DU 隠れる DU させた AuxV

・ソナムはタシに岩の後ろに隠れさせた

(34)でLA格助詞を用いると容認度が下がるのに対し、補文に同じ動詞 *sdod* を使っても、次のようにLA格を適格であると容認することがある。

(36) tshe-dbang gis bkra-shis  $\phi$  /la khang-pa 'di'i nang la sdod du bcug·pa red/

<人名> GIS <人名>  $\phi$  /LA 建物 これ-GI 中 LA 居る DU させた-PART VI

・ツェワンはタシにこの建物の中にいさせた

この例を見れば、(33)～(35)の場合にLA格助詞が適格とならないまでも不適格にならない理由は、被使役者と動詞 *sdod* の間に他の要素が入って、両者の距離が遠いため、被使役者であることを明示するために被使役者にLA格助詞を付加することができると考えられる。

いずれにせよ、使役文が自動詞補文を持つときは、被使役者名詞は絶対格になるのが無標である。

### 3.2.2 他動詞補文

次に、補文に他動詞が用いられる場合について見る。

3.2.1節で見たように、自動詞補文では被使役者は通常絶対格になる。これまでの研究においては、他動詞補文でも被使役者名詞がつねに絶対格であるかのように例示されてきた。たとえば、次の例において被使役者名詞はGIS格にならずに、絶対格で現れる。

(37)a. bkra-shis kyis nga brdungs byung/

<人名> GIS 私 殴った AuxV

・タシは私を殴った

b. bsod-nams kyis bkra-shis  $\phi$  /\*kyis nga rdung du bcug song/  
<人名> GIS <人名>  $\phi$  /GIS 私 殴る DU させた AuxV

・ソナムはタシに私を殴らせた

(38)a. ma-chen gyis g.yogs-po phag-pa gsod du bcug·pa red/  
コック GIS 召使い- $\phi$  豚 殺す DU させた -PART VI

・コックは召使いに豚を殺させた

(39)a. ma-chen gyis g.yogs-po kha-lag bzo ru bcug·pa red/  
コック GIS 召使い- $\phi$  食事 作る DU させた -PART VI

・コックは召使いに食事を作らせた

(40)a. a-ma·lags kyis phru-gu chu skol du bcug·pa red/  
母(h) GIS 子供- $\phi$  水 沸かす DU させた -PART VI

・お母さんは子供に水を沸かさせた

ところが、筆者の調査では、以下のように被使役者が絶対格と並んでLA格助詞を取る例が見られる。

(41)a. ngas yi-ge bris·pa yin/  
私-GIS 手紙 書いた -PART VI

・私は手紙を書いた

b. bkra-shis kyis ngar yi-ge 'bri ru bcug byung/  
<人名> GIS 私-LA 手紙 書く DU させた AuxV

・タシは私に手紙を書かせた

(37)c. bsod-nams kyis bkra-shis la nga rdung du bcug song/  
<人名> GIS <人名> LA 私 殴る DU させた AuxV

・ソナムはタシに私を殴らせた

(38)b. ma-chen gyis g.yogs-po la phag-pa gsod du bcug·pa red/  
コック GIS 召使い LA 豚 殺す DU させた -PART VI

・コックは召使いに豚を殺させた

(39)b. ma-chen gyis g.yogs-po la kha-lag bzo ru bcug·pa red/  
 コック GIS 召使い LA 食事 作る DU させた-PART VI  
 ・コックは召使いに食事を作らせた

(40)b. a-ma·lags kyis phru-gu la chu skol du bcug·pa red/  
 母(h) GIS 子供 LA 水 沸かす DU させた-PART VI  
 ・お母さんは子供に水を沸かさせた

この点については、これまで必ずしも明確には指摘されていない。Goldstein and Nornang(1970)や Goldstein(1991)があげている例においても、他動詞補文において被使役者が絶対格で現れているし、物語などから得られるデータにおいても、使役文に被使役者が明示される例は少ないが、現れている場合はすべて絶対格で現れており、LA格で現れているものはない。しかし、絶対格で現れるのは構造上の問題ではなく、むしろ、より口語的な表現であるなどの文体的問題が関わっている可能性がある。

たとえば、次のように、補文が他動詞でありながら、被使役者にLA格助詞を付加することが許されない例がある。

(42) bsod-nams kyis bkra-shis  $\phi$ /?la bde-skyid la yi-ge gtong du bcug·pa red/  
 <人名> GIS <人名>  $\phi$ /LA <人名> LA 手紙 送る DU させた-PART VI  
 ・ソナムはタシにデキーに手紙を送らせた

(43) bkra-shis kyis bsod-nams  $\phi$ /\*la ri la lta ru bcug song/  
 <人名> GIS <人名>  $\phi$ /LA 山 LA 見る DU させた AuxV  
 ・タシはソナムに山を見させた

しかし、これらは、LA格名詞が二つ重なることが文体的に嫌われているという可能性が大きい。たとえば、次の(44a)では、被使役者名詞がLA格助詞を取るときには補文の被動者名詞は絶対格になっており、(44b)ではその逆になっているが、両者の意味は等しい。

(44)a. bkra-shis kyis bsod-nams la me-tog lta ru bcug song/  
 <人名> GIS <人名> LA 花 見る DU させた AuxV  
 ・タシはソナムに花を見させた

- b. bkra-shis kyis bsod-nams me-tog la lta ru bcug song/  
 <人名> GIS <人名> 花 LA 見る DU させた AuxV  
 ・ (同上)

*lta* は基本的に他動詞であるので、(44a)のように *bsod-nams* にLA格助詞が付加されることが期待される。(44a)では、目的語として絶対格名詞を取った *lta*「見る」が埋め込まれたとも考えることができるが、(44b)で *bsod-nams* に LA格助詞が付加されないのは、たんに LA格助詞が重なって現れることを嫌うという文体的な問題を考慮する必要があることを意味する。

ただし、次の例のように LA格助詞が連続的に現れることが許されることもある。

- (45) bkra-shis kyis bsod-nams la sge'u-khung nas phyi-logs la lta ru bcug song/  
 <人名> GIS <人名> LA 窓 NAS 外 LA 見る DU させた AuxV  
 ・ タシはソナムに窓から外を見させた

(45)では、(44)と比べて、被使役者と、*lta*「見る」の対象であるLA格名詞との間に他の要素が入っており、文中における両者の距離が遠いために被使役者のLA格助詞が許容されているように思われる。これは、(36)の自動詞補文と同様のことであり、LA格助詞は被使役者名詞を明示するための手段となっていると考えられる。

以上見たように、筆者の調査では、多くの場合LA格と絶対格の両方が許される。さらに、従来の見解とは異なり、次の例のように絶対格が容認されないこともある。

- (46) bsod-nams kyis bkra-shis la/\* $\phi$  nor-bu brag gi 'og la sbad tu bcug song/  
 <人名> GIS <人名> LA/ $\phi$  宝物 岩 GI 下 LA 隠す DU させた AuxV  
 ・ ソナムはタシに宝物を岩の下に隠させた

ここでLA格助詞が用いられるのは、被動作者を明示するためであろう。

したがって、文体的にLA格になったり絶対格になったりすることはあるが、原則としては、他動詞補文を取る使役文の被使役者名詞はLA格助詞を取ると考えられる。そして、被使役者名詞を標示するこのLA格助詞は、DU格助詞に置き換えることができない。

3.2.1節と3.2.2節での観察から、自動詞補文では被使役者名詞が絶対格になるのに対し、他動詞補文ではLA格助詞を取ることが普通であることがわかる。補文の行為者名詞すなわち被使役者名詞が GIS格助詞を取れず、基本的にはLA格助詞を取る

点が、他動詞補文については GIS格助詞を取ることができる名詞化接辞 *pa* による (A) タイプの使役構文との大きな相違点である。

3.2節での観察は次のようにまとめられる。

- 1) 自動詞補文の被使役者は絶対格になる。ただし、自動詞補文においても、とくに被使役者を明示したい場合は LA格助詞が用いられることがある。
- 2) 他動詞補文においては被使役者には LA格助詞が付加される。ただし、文体的に（たとえば口語体で）絶対格が好まれることがある。

### 3.3 DU格助詞

これまで見てきたように、LA格助詞が使え、DU格助詞が使えない場合は、主語や目的語などのような文法的な機能と関係していた。それに対し、DU格助詞が使え、LA格助詞が使えない場合として、使役文の補文の動詞に付加されるものがある。

(B) のタイプの使役文で補文に一般動詞を使うものは、3.2節で見たとおりのある。そこでの例では、いずれも、動詞の語幹に付加されたDU格助詞はLA格助詞と交替できない。たとえば、次の(47)のような例がある。

(47) *bsod-nams kyis bkra-shis la nga rdung du/\*la bcug song/*

<人名> GIS <人名> LA 私 毆る DU/LA させた AuxV

・ソナムはタシに私を毆らせた

DU格助詞はLA類格助詞の一種であるから、3.2節の初めにも書いたように、もし (B) タイプの使役構文が「～を … に入れる」を意味すると解釈されるとすれば、DU格助詞は「… に」にあたる部分を表していることになろう。上では、被使役者に関してこの解釈が成り立ちにくいと述べた。同様に、「… に」の部分についても、行為を入れる場所を表しているだけなら、DU格助詞の代わりにLA格助詞も使えるはずであるが、実際にはLA格助詞を使うことはできない。そのことにより、ここで使用されるDU格助詞は意味的な機能ではなく、不定詞補文を導くというような文法的な機能を果たしていると考えられることができる。

さらに、このようなDU格助詞を含む構文として、格桑(1982)が示した使役構文の一種として本節の最初で述べた (C) タイプの形容詞の語幹を用いるものがある。しかし、これは、(C) が特別な構文であるというよりは、主文の動詞が異なっているだけで、全体の構造としては、(B) の構造で自動詞補文を取っている場合 (3.2.1節) と同一であると考えられることができる。

(48) bkra-shis kyis shog-bu chung du/\*la btang song/

<人名> GIS 紙 小さい DU/LA 送った AuxV

・タシは紙を小さくした

この文では、*btang* (pf. < impf. *gtong*) が主動詞として行為者を導入し、全体では他動詞文となっている。いずれにせよ、形容詞語幹は状態を表す自動詞と同じ働きをしていると考えられる<sup>25</sup>。したがって、(B) と (C) の使役文は、

(D) Vstem + DU + Vc (Vc は使役動詞)

と書き換えることができる。この場合、Vstem には形容詞語幹も含まれ、Vc は 'jug と *gtong* である。ただし、Tsultrim Kelsang 氏の判断では、Vc が 'jug のときは V として形容詞語幹は用いられない。

また、次の例を見ていただきたい。形容詞に対する使役文と同様の構造を持っているが、これまでのところ使役文としては扱われていない。しかし、内容的には使役のようなニュアンスを含んでいる。

(49) bkra-shis kyis bsod-nams φ/?la/\*kyis stag gsod du ri la btang song/

<人名> GIS <人名> φ/LA/GIS 虎 殺す DU 山 LA 送った AuxV

・タシはソナムを虎を殺しに山に送った

(49)をインフォーマントに提示すると、絶対格の被使役者名詞が容認され、LA格は容認されない。これは、*bsod-nams* が *btang* の目的語であると解釈されるからであり、'jug を用いた使役文との大きな違いである。しかし、提示の仕方を変えると、絶対格である場合より容認度は低い、*bsod-nams* がLA格になることも許容さ

<sup>25</sup> チベット語において、動詞と形容詞の形態的な相違点は、動詞が単音節であるのに対し、形容詞は *po* または *pa* という接尾辞を取るか語幹の重複によって2音節となる点にある。しかし、形容詞は、語幹のみで用いられる場合、動詞と区別する手段はなく、意味的には状態動詞と言える。いわば、動詞と形容詞は「動詞類」というような一つのグループに分類されうる。



れることがある<sup>26</sup>。使役的なニュアンスを持つ構文として (D) の構造が一般的に有効でありそうである。

次の(50)では、主動詞として 'gro「行く」(pf. *phyin*) が用いられている(ただし、この場合は無意志動詞である)。むろん、これも使役文ではなく、自動的な変化を表す。

(50) *gnas-tshul yag tu/\*la phyin song/*  
状況 良い DU/LA 行った AuxV  
・状況は良くなった

(50)は、形容詞語幹にDU格助詞を付加することによって単文構造ではなくなっている。形容詞語幹は動詞と同じように機能するから(註25参照)、(50)の構造は使役構文で動詞語幹にDU格助詞が付加するのと類似している。構造的には、例(48)の使役構文の動詞 *gtong* (pf. *btang*) を 'gro に換えただけである<sup>27</sup>。

第2節では、例文(22)を奪格的なLA格助詞の例としてあげたが、これも使役的なニュアンスを持っており、ここで見ている構造と同じ機能を持っていると考えられる。(主動詞の 'gro は(22)では意志動詞であったが。)

格桑(1987:93)は、このようなDU格助詞について「以形容詞詞根作補語時、la類格助詞兼表変化結果和程度。」すなわち「形容詞語根を補語とするとき、LA類格助詞は変化の結果と程度を表す。」と述べている。しかし、以上で見てきたように形容詞語幹にDU格助詞を付加することによってできた使役文の構造も、動詞語幹

---

<sup>26</sup> 次のように例文(49)の一部だけを提示する。

(n1) *bsod-nams φ/la/\*kyis stag gsod du*  
<人名> φ/LA/GIS 虎 殺す DU

この場合、インフォーマントの内省では、おそらく使役文を想定していると考えられるが、いずれにしても *gsod*「殺す」の行為者として意識されるとLA格助詞を容認するようになることがわかる。

<sup>27</sup> なお、(n1)のような構文があり、(50)と同様の意味を表している。

(n1) *gnas-tshul yag-po yong song/*  
状況 良い 来た AuxV  
・状況は良くなった

(n1)がどのような構造を持っているかは十分検討する必要があるが、形容詞述部の拡張にすぎないと思えることができる。

に DU格助詞を付加して補文を導く使役文の構造と同じである<sup>28</sup>。

ここで見てきたDU格助詞は名詞ではなく形容詞を含む動詞類に付加されている。LA格助詞やNA格助詞が接続詞的に動詞に付加されることがあるが、それらに前接するのは文であると考えられるのに対し、DU格助詞に前接している部分が少なくとも文でないことは明らかである。DU格助詞を伴った動詞は、GIS格の行為者を取ることができず、時制を持たない点で完全な文の形式を保っていないと言える。ここでは、それを「不定詞」と呼んでおく。

### 3.4 まとめ

本節では、使役文の中でのLA類格助詞（LA格助詞とDU格助詞）の機能について考えた。チベット語の補文構造については従来名詞節を観察することが多く、本節で見たような動詞の「不定詞」を用いた構造については、言及されることがなかった。このような「不定詞構造」がチベット語にあると考えるためには関連する構文を見つけ出さなければならない。

その上で、全体の構造を明確に示すには、さらに根拠となる例をあげなければならないが、少なくとも、ここではLA格助詞やDU格助詞の分布が異なり、それぞれ異なった文法的な機能を持つことを示すことができたと思う。

### おわりに

本稿では、LA格助詞について高橋(1989a)で示されたような意味機能のほかにかきわめて文法的な機能があることが明らかになった。LA格助詞が奪格的な意味を表す用法については、必ずしも文法的機能とは言えないが、それが文法的機能に連なるのではないかということを示した。GIS格が本来道具格の意味を持つと同時に文法機能としての能格現象に関与していることと同様に、LA格助詞もその本来的な意味を保ちながら文法的な機能を示す重要な格助詞であると考えられる。また、3.3節での観察から DU格助詞が「不定詞」構造を導く文法的な役割を持つことがわかる。この DU格助詞は文語において LA格助詞と交替することができなかつたために、現代語においても LA格助詞に取って代わられることなく使用されていると考えることができる。

---

<sup>28</sup> 格桑(1987)も、文語文法においてLA類格助詞の機能の一つとされる *de-nyid*「同体、同性」という項目に一般動詞の使役文を含め、形容詞語幹を使う構文と同一のものとして扱っている。文語文法の *de-nyid* という分類が、本稿との関連で何を意味するかは考察に値する。今後の課題である。

Keenan and Comrie(1977:95)は、(51)のような到達可能性の階層 (Accessibility Hierarchy) を提示して、次のように述べている。

..., it is shown that the AH [Accessibility Hierarchy] is useful in the syntactic description of causative constructions, in particular synthetic causative formations, in a variety of languages. Summarizing the argument presented in the cited work, we may say that the syntactic position used to encode the causee of a causative construction (i.e. the individual caused to carry out some action) will be the highest position on the AH that is not already occupied.

(51) Accessibility Hierarchy (Keenan and Comrie[1977:66])

SU > DO > IO > OBL > GEN > OCOMP

(SU = subject, DO = direct object, IO = indirect object

OBL = oblique, GEN = genitive, OCOMP = object of comparison)

この記述によれば、一般的に使役文の他動詞補文における行為者名詞は、主文の行為者が主語、補文の被動者が直接目的語であれば、間接目的語になるため、与格を付与される可能性があるということになる。つまり、チベット語も他動詞補文の行為者がLA格助詞を付与される点でこの類型論的傾向に従っていることになる。

しかし、与格の機能は、一般的に見てもかなり複雑であり、チベット語においてもさらに検討を要する。とくに、LA類格助詞の全体を考えるためには、3.3節で見たDU格助詞だけではなく、LA格助詞やNA格助詞が動詞に付加される用例を観察する必要がある。それらは接続詞的に用いられ、意味的には、LA格助詞は行為を積み重ねるように連続させていく意味を持ち、NA格助詞はある行為の範囲内で別の行為が行われることを述べる点で条件を表すと思われる。構造的には、3.3節で述べたように、両者に前接する部分は文の形式を保っていると考えられる。

さらに、奪格助詞の *las* や *nas* が *la+s* (LA格助詞と奪格を表す *-s* との組み合わせ)、*na+s* (NA格助詞と *-s* との組み合わせ) であると説明されることがあるが、そうであるなら、なぜ *du+s* (DU格助詞と *-s* との組み合わせ) が形成されなかったかということも問題になる。この問題は、LA格助詞、DU格助詞、NA格助詞の機能の違いを反映している可能性がある。この問題を解決するには、DU格助詞の分布が現代語では非常に限られているため、文語や方言でのDU格助詞の分布を研究する必要がある。

## 参考文献

格桑居冕

1982 「藏語動詞的使動範疇」『民族語文』(5):27-39.

1987 『実用藏文文法』成都：四川民族出版社.

Goldstein, Melvyn C.

1991 *Essentials of Modern Literary Tibetan - A Reading Course and Reference Grammar*. With Gelek Rinpoche and Lobsang Phuntshog. Berkeley: University of California Press.

Goldstein and Nornang

1970 *Modern Spoken Tibetan: Lhasa Dialect*. Bibliotheca Himalayica series II No.14. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar. 1984<sup>3</sup>.

Keenan, Edward L. and Bernard Comrie

1977 Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *LI* 8(1):63-99.

Kitamura, Hajime, Tatsuo Nishida and Yasuhiko Nagano eds.

1994 *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*. Osaka: The Organizing Committee The 26th ICSTLL.

高橋慶治

1989a 「現代チベット語における格助詞の意味機能について - LA格助詞を中心に -」修士論文. 京都：京都大学.

1989b 「現代チベット語におけるLA格助詞と $\phi$ 格」『日本西藏学会々報』35: 2-10.

1992 「現代チベット語における動詞の分類」『国立民族学博物館研究報告』17(2):343-68.

1995 「現代チベット語（中央方言）における格助詞と動詞の項構造」博士論文. 京都：京都大学.

武内紹人

1978 「現代チベット語における文の構造」修士論文. 京都：京都大学.

Takeuchi and Takahashi

1994 Split Ergative Patterns in Transitive and Intransitive Sentences in Tibetan: a Reconsideration. In Kitamura, Nishida and Nagano eds.:649-59.

Tournadre, Nicolas

1991 The rhetorical use of the Tibetan ergative. *LTBA* 14(1):93-107.

1994 Tibetan Ergativity and the Trajectory Model. In Kitamura, Nishida and Nagano eds.:637-48.

資 料 (括弧内は、本文中で引用する際の略称)

*Taranathae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione*. Antonius Shiefner  
(1868). Tokyo: Suzuki Research Foundation. rep. 1963. (*Tāranātha*)  
『尸語故事』(藏文) 拉薩: 西藏人民出版社、1980. (*ro sgrung*)

(たかはし よしはる、京都大学)

## Grammatical Functions of LA Case Marker and DU Case Marker in Tibetan

Yoshiharu TAKAHASHI

The studies on the case markers in Tibetan have centered around the GIS Case Marker, because of its role in ergative constructions. However, there have been only a few studies on other case markers. In my previous studies, I have made clear that the LA Case Marker indicates the direction or the goal of movement and change, and that it is used according to its meaning. Its grammatical functions, however, have not been explained well.

In this paper, I treat the grammatical functions of the LA Case Marker and the DU Case Marker. First, I show that both the LA Case Marker and the DU Case Marker express the location of existence, action, and the direction of movement and change. The LA Case Marker can also indicate a dative subject and a dative object while the DU Case Marker cannot. Thus, although the nouns in dative subject and object express the direction or the goal of moving and changing, only the LA Case Marker can be used. In other words, the LA Case Marker, but not the DU Case Marker, is used for arguments with grammatical function.

Second, the LA Case Marker is used for expressing the meaning which may be called ablative. For example, in a sentence like ‘I borrowed a horse from Tashi’, the LA Case Marker is used in the phrase ‘from Tashi’. The exact function of the case marker in this usage is elusive, but I suggest that it may be correlated with the usage treated in the next section.

Third, in section 3, I treat the causative constructions. In causative sentences, the causee is case marked differently according to the type of embedded clause. When the embedded verb is intransitive, the causee takes no case marker, that is, it appears in the absolutive case. On the other hand, when the embedded verb is transitive, the causee can take only the LA Case Marker and not the DU Case Marker, and the DU Case Marker is attached to the embedded verb.